【海外ボランティア】

国際機関実務体験プログラム[i]

横浜市国際交流協会（ＹＯＫＥ）での実務体験研修を通じて

私は、公益財団法人横浜市国際交流協会（以下、ＹＯＫＥ）で100時間の実務体験研修を修了した。ＹＯＫＥでの100時間の研修内容は主に、ＹＯＫＥ事業のヒアリング、多文化共生・国際協力・人材育成の３つの分野に関わる事業体験、プログラム共通事業（中間研修会、国際機関見学会、最終報告会）への参加の３つである。

潮田小学校での放課後の学習支援の様子

私は、以前から外国籍住民の抱える諸問題や日本の多文化共生事業に強い関心があった。そこで、多文化共生に向けた取り組みの現場やその実態を知りたいと思い、本プログラムに応募した。特に、私は多国籍の人々が多数住んでおられる地域での国際交流ラウンジの運営について学びたいと思い、ＹＯＫＥが運営している鶴見国際交流ラウンジの多文化共生事業に着目し、「外国につながる子ども達の学習支援」への参加やその運営に関わるさまざまな分野の方々へのヒアリングを行った。そこから、鶴見における多文化共生の取り組みについて学んだ。そうした経験から見えたものは、鶴見区、鶴見国際交流ラウンジ、地域に根差したＮＰＯ、外国人や、有識者、多様なバックグラウンドを持つボランティアなど、行政レベルから市民レベルまで非常に幅広い方々がそれぞれ密接に関わり合って、一つの多文化共生の街づくりが進められているということである。つまり、横浜市やＹＯＫＥに加えて、市民の有志や個々の協力や支えがあって多文化共生事業が推進されていることを学んだ。

ＹＯＫＥでの最終報告会の様子

また、インターンの期間中、横浜の多文化共生分野の最前線で活動されておられる多くの方々とお話をさせて頂く機会があった。その中で、要求されるキャリアやスキル、幅広いネットワーク、現場でのジレンマなど、自分が将来の多文化共生の分野に関わるための糧を得たと感じている。この糧を将来の多文化共生分野や私の地元の岐阜県可児市での活動にも生かしていきたいと思う。ありがとうございました。

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　宮田祐磨）

---

[i]（公益財団）横浜市国際交流協会と明治学院大学を含む横浜市内４大学が協働でおこなう「国際機関実務体験プログラム」。実施概要は「明治学院大学ボランティアセンター報告書第９号」（2012）を参照。

国際機関実務体験プログラム
ＪＩＣＡ横浜での実務体験研修を終えて

【参加目的】

私はこれまで国際協力に興味を持っていたが自分には何ができるのか分からず、この研修プログラムに参加することでヒントを得たいと考え、応募した。現場では、まずＪＩＣＡ横浜がおこなう支援の内容や方法を学び、その中で自分の関心と適性に合った活動を見つけ、最終的にその自分の適性に合った活動を探し参加することを目標とした。

【活動内容】

研修ではＪＩＣＡ横浜における業務内容に関する講義からその支援の方法を学び、そのアウトプットとしてＪＩＣＡ横浜に設置されている食堂のＰＯＰづくりや海外研修員の方との交流、イベントで途上国の現状をクイズや絵本の読み聞かせを通じて伝える等であった。それに加えＪＩＣＡ職員の方の許可を得て研修の活動記録を Facebook にアップし、友人らにＪＩＣＡ横浜の活動について紹介した。身の周りに国際機関に興味のある友人が多かった事と、ＪＩＣＡの広報としても役立つと考えたために行った。

【成果】

一番の学びは途上国や支援の現状を伝えることが国際協力の第一歩になるということだ。国際協力を伝える意義や自分に適性への気づきがきっかけに Facebook での活動記録をみた友人から「自分もＪＩＣＡの活動に携わりたい」という連絡があり、ＪＩＣＡの広報として役に立ったと感じた。広報活動は人と途上国を近づける事ができると感じた瞬間だった。そしてこの研修をきっかけに国際協力を行う団体に所属し、そこで韓国の文化を伝える広報活動を行っている。自分の関心はさらに広がり、まちづくりという視点から日本国内での多文化共生について学びたいと考えている。今後は１年間カナダのトロントに留学し、多国籍なこの町での多文化共生について学び、そのノウハウを日本に持ち帰り新たな活動を始めようと考えている。

最後にこんな素敵な機会を与えていただいたＪＩＣＡ横浜、ＹＯＫＥ、大学の皆様にお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

（社会学部社会学科２年　安藤美沙紀）

子どもたちに絵本の読み聞かせ

同期の仲間と指導担当のＪＩＣＡ横浜職員

ＳＨＩＰ (Social Hub Information Partners)

ＳＨＩＰはＥＴＩＣ.と連携した社会起業家育成・インターンシップ、毎月著名な社会人を招いて議論をするソーシャル・イノベーション・アカデミー、日経ＧＳＲに参加するＧＳＲ研究会の３本柱で活動している。

【社会起業家育成】

11 月 25 日≪行動力とは～ TAKE ACTION ～≫をテーマにゲストを招いて話を聞いた。

●とにかく自信を持って、自分のやりたいことをやる。

一人目は小野田拡崇さん。在学中に起業。きっかけは入学してふと自分を見つめ直した時、自分は何がしたいのか…という大きな壁にぶつかったこと。思考錯誤をし、出した答えは「誰かの為に生きることは、自分の為に生きること。」

農業の中に課題を見出し、それに向き合うことに。しかし、大きな壁は何度も立ちはだかるが、そんな状況でも事業を続けられるのは熱い想いがあるから。「無理」という言葉を使わない、という話からも小野田さんのお話や発する言葉の一つひとつには、起業にかける“熱意”を感じとることができた。

●恋せよ、明学生。

二人目は可部州彦さん。政府、ＮＰＯ、国連…とさまざまなキャリアを積み、現在は本校の教養教育センターに勤めている。

気づき、考え、行動し、実行する。「人を納得させてこそ成果。その瞬間が最高に快感。」

さまざまな肩書きよりもこれが最高に気持ちが良いと話す。しかし、この快感を得るためのプロセスは容易ではない。裏付けのある努力、想いを具現化する力、人を巻き込み、「欲望のままに動く。要は“やる”」この言葉に可部さんの≪行動力≫の起源が垣間見えたような気がした。

（学生メンバー　法学部政治学科４年　川上果穂）

【ソーシャル・イノベーション・アカデミー】

８月 29 日、明治学院大学の卒業生でもある渡部陽一氏を招き、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームと共催で、アカデミー「アフガニスタンの今～日本のＮＧＯの役割とは」を開いた。

渡部氏は、マイクを持ちながらスクリーンの前に出て、参加者に語りかけるように、話を進めた。ス

クリーンには、戦場で撮影した多くの写真が映された。厳しい環境の中、不安を抱えながらも笑顔で過ごす子ども達の姿が印象的だった。渡部氏は「戦場の子ども達の笑顔には力がある。戦場でも力強く生きる人々がいることを写真で伝えたい」。また、学生時代に海外に行ったことが戦場カメラマンになるきっかけとなったと明かし、会場を埋めた学生に向け、海外にどんどん行って、違う価値観に触れて、と呼びかけた。

写真提供：ジャパン・プラットフォーム

講演の後は、パネルディスカッションで、公益財団法人ケア・インターナショナル ジャパン、特定非営利活動法人難民を助ける会、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、特定非営利活動法人ＡＤＲＡ Japan、特定非営利活動法人ジェンの５名のパネリストが登壇した。アフガニスタンにおける問題は何なのか。その問題に対してどのような支援が必要なのか、などアフガニスタンにおける日本のＮＧＯの在り方について熱い議論が展開された。

（学生メンバー　法学部政治学科３年　今井柚良）

【ＧＳＲ研究会－大学生とともに考える地球の未来－アイディアコンテスト】

日経ＧＳＲ学生アイディアコンテストは、参加８企業の中から選んだ２社のリソースを組み合わせ、地球規模の問題を解決するプランを立案し、９大学がプレゼンテーションを行い競い合うビジネスコンテストだ。2013 年は第４回に当たり９月 28 日、電通ホールで開催された。参加大学は慶応義塾大学、法政大学、明治大学、立教大学など９校であった。

明治学院大学の日経ＧＳＲ研究会は千代田化工建設株式会社と富士ゼロックス株式会社のリソースをもとに、「ブラジルであふれる光を水に～世界に通じる温暖化時代の持続可能な適応策」というテーマでプレゼンテーションを行った。

これは、干ばつ地域における水不足の解消を進めるという提案である。ブラジルのペルナンブコ州内にモデルビレッジを設定、千代田加工建設のプラント技術・太陽光発電システムを用いた省エネルギー水ろ過装置を建設および安価で安全な水の販売と、富士ゼロックスのＩＴ技術を使った、住民の水不足への意識向上をはかる水の管理システムの導入を考えた。水不足の解消だけでなく、住民たちの水に対する意識向上も見込んだ、その企画力の高さと、力強く、メッセージが明確に伝わるプレゼンテーション力が評価され、優秀賞を受賞することができた。

私は、日経ＧＳＲ学生アイディアコンテストに２年連続で出場し、さまざまな視点からのものの見方や、企業のあり方、プランニング、プレゼンテーション等について多くの事を学ぶことができた。中で

も自身の一番の変化は“ボランティア”の考え方である。“ボランティア”という言葉の社会における認識は、まだまだ“奉仕”である。しかし、社会を構成する企業が、本業を通して社会貢献を行うことも、根本には“ボランティア”精神の理念で存在することをＧＳＲの場で何度も実感することができた。授業でＣＳＲ（企業の社会的責任）については、しっかり勉強してきたが、このプレゼンは、それを現実にあてはめて、地球規模の社会的課題をどう解決するかを実践的に学ぶもので、卒業後の生き方にもさまざまな示唆を得た。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科４年　荻野真奈美）

海外プログラム事業部
ＮＧＯ・社会起業家アカデミー

ＮＧＯ・社会起業家アカデミーは、海外プログラム事業部の学生メンバーが中心となり、世界で活躍するＮＧＯ関係者や社会起業家の方々をお呼びし、明学生にお話しいただく講演会だ。2013 年度は、６月から８月にかけて毎月１回行った。３回目は、ジャパン・プラットフォーム主催で、本学ＯＢの「戦場カメラマン」渡部陽一氏を招いて「アフガニスタンの今～日本のＮＧＯの役割とは」と題したシンポジウムとなったのでここでは報告を省き（99 ページ参照）、第１・２回目について報告する。

【第１回　篠田ちひろさん（クル・クメール代表）】

篠田ちひろさんは、隣国であるベトナムやタイ産の物が、カンボジア産として売られている事を知り、「本当のカンボジア産のお土産に誇りを持たせたい」との思いから、2009 年にカンボジアでクル・クメールを設立し、カンボジアの伝統医療であるハーブを使っての土産事業を開始した。現在までに入浴剤、キャンドル、リップクリームなどを販売している。

代表の篠田ちひろさんとハーブ

講演会では、特に篠田さんが社会起業家になるまでの物語に興味を示した学生が目立った。篠田さんは就職先も決まった大学４年生の冬に内定を辞退し、そのまま単身でカンボジアへ渡ったそうだ。

この講演会では、社会起業家に求められる「覚悟」と「行動力」を認識させられた。９月には、カンボジアスタディツアーで訪問し、さらにお話をうかがったり、実際にハーブなどを使った商品の製作体験もさせていただき、理解を深めた。　（学生メンバー　国際学部国際学科２年　田中優熙）

【第２回　浜田憲和さん（公益財団法人プラン・ジャパン職員）】

２回目は、浜田憲和さんを招き、「なぜ今発展途上国なのか」というテーマでお話しいただいた。プラン・ジャパンは、子どもと一緒に地域開発を進める国際ＮＧＯで、活動国は 50 ヶ国、８分野において支援し、地域の自立をめざしている。子どもを取り巻く世界の現状は良くなってきているが、未解決の問題が沢山ある。一体、子ども達の生きる権利や、守られる権利、育つ権利、参加する権利は誰が守るのか。浜田さんは、国家や地域、家族に義務があると話してくださった。

さらに、ネパールの「カムラリ」という家事労働を強制させられる女の子の映像も見せていただいた。最後は、女の子が性別を理由に教育や就労、医療などを受けられない状況の改善をめざした「Because I am a girl キャンペーン」について説明していただき、「Raise Your Hand」という支援表明活動にも参加した。自分たちにできることを考えるきっかけになり、秋には 10 月 11 日の「国際ガールズ・デー」に向けて、学内でのさまざまな活動につながった。　（学生メンバー　国際学部国際学科１年　金城燎）

海外プログラム事業部

総括

海外プログラム事業部は、貧困や教育、開発、ジェンダーなど、さまざまな国際問題に取り組むＮＧＯ（非政府組織）や国際機関、社会起業家などについて学び、実際にボランティア活動をすることも目的としている。今年度、学内外からのご協力を得て、「ＮＧＯ、社会起業家アカデミー」のほかに実施した主な活動は、以下の通りである。

【アフリカ開発会議（ＴＩＣＡＤ Ｖ）でのブース展示（６月１～２日）】

横浜で開催されたアフリカ開発会議（ＴＩＣＡＤ Ｖ）において、ＪＩＣＡ（国際協力機構）横浜４階ロビーで、日本企業のアフリカでのＢＯＰ（Base of the Pyramid の略。収入が少ない低所得者層。）ビジネス例に関する展示を行なった。前年度末に実施した企業インタビューを日本語と英語でまとめた冊子を配布したほか、ＢＯＰビジネス商品の栄養食品や手洗い用洗剤等を展示した。

ブースにて鵜殿学長と学生メンバー

【ＮＧＯ、ソーシャルビジネススタディツアー（９月３日～９日）】

12 名の学生がカンボジアを訪問し、貧困や就労問題、伝統工芸の復活などへのＮＧＯや社会起業家の取り組みを学んだ。また、国外での赤十字社の活動を学ぶ良い機会にもなった。

訪問先：難民を助ける会、カンボジア赤十字社、赤十字国際委員会　コンポスプーリハビリセンター、マダムサチコ　アンコールクッキー、かものはしプロジェクト、ＩＫＴＴ　クメール伝統織物研究所、クル・クメール、スバエク工房

【「国際ガールズ・デー」啓発イベント（９月～ 10 月）】

「国際ガールズ・デー」（10 月 11 日）の国内での認知度を高めようと発足した「国際ガールズ・デー推進ネットワーク」の一員として、横浜キャンパスでの生協売店や図書館でのブックフェア同時開催や、パキスタンからの女子学生を招いたシンポジウム、ガールズ・デー当日はチアリーダーによる女の子たちを応援するパフォーマンス披露などを行なった。

実質的な活動初年度となり、次年度以降は、イベントを通じた啓発活動にくわえ、社会をさまざまな角度から視る調査などにも学生たちには取り組んでもらいたい。また、国内にある国際問題へも目を向けてほしいと考えている。（中原）

国連ユースボランティア

国連機関の国連ボランティア計画（ＵＮＶ、本部ボン）は、日本国内の６大学から選出され、ＵＮＶの選考に合格した大学生 12 名を国連ユースボランティアとして 2013 年９月より 2014 年３月までの６ヶ月間、12 ヶ国に派遣している。2013 年度に学生が派遣されたのは、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、東ティモール、ベトナム、ウクライナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、サモア、フィジー、エチオピア、ケニア、ルワンダの 12 ヶ国である。本学の学生は波多野俊（国際学部国際学科３年）がバングラデシュに、落合雅恵（国際学部国際学科２年）がケニアに派遣された。

派遣機関は、開発途上国の国連事務所、政府機関またＮＧＯ等で、業務内容はホームページやポスター作成などの広報活動やプロジェクト運営支援などを通して、教育・保健衛生・環境・ジェンダー・貧困削減など国連ミレニアム開発目標（MDGs）[ii] 達成に貢献することを目指している。(写真はＵＮＹＶのＨＰに掲載された 2013 年度派遣学生。前列右から２人目が落合さん、後列右から２人目が波多野さん)。

国連ユースボランティアは、もともと日本では関西学院大学が国連学生ボランティアとして 2004 年から海外に学生を派遣していたが、本学からも学生派遣の希望を関西学院大学に伝えて 2011 年から準備を重ねてきた。

2013 年に日本政府が２年間のパイロット事業として 2013 年度と 2014 年度の２年間ＵＮＶに拠出した後、日本政府の拠出を受けたＵＮＶと関西学院大学は「国連ユースボランティア・パイロット事業」[iii] の実施に関する覚書（ＭＯＵ）を交わした。同時に関西学院大学は、このパイロット事業に参加する日本国内５大学 (明治学院大学、上智大学、明治大学、東洋大学、立教大学) と国連ユースボランティアの派遣に協力する了解事項を取り交わし、学内選考に合格した学生をＵＮＶ選考に送り出すことが可能となった。

当事業の名称に「ボランティア」が使用されているために、ボランティアセンターの範疇に見られがちだ。しかし、派遣された学生たちが担う業務は、派遣国の若者のボランティア活動を促進することを目的とした業務を担うプロフェッショナルの国連職員（もしくは国際ＮＧＯ）の補佐として有給で働くことで、無償の「ボランティア」、ＵＮＶが業務対象とする「若者ボランティア」ではない。業務内容から見ればボランティアより、インターンシップの名称の方が実態に近い。

「グローバル人材」育成が注目される中、同事業は貴重な機会を学生に提供しうるものであろう。

（齋藤）

[ii] 国連ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals, MDGs）は、国連が 2015 年までに極度の貧困や飢餓を撲滅するために定めた８つの目標のこと。

[iii] 国連ユースボランティア・パイロット事業、写真含む　http://unv.or.jp/unvjp/unv-youth/（2014 年２月４日アクセス）

国際的ネットワークの東雲：ＩＡＶＥアジア太平洋地域会議(マカオ)報告

ＩＡＶＥとは英語の International Association for Volunteer Effort（ボランティア活動推進国際協議会）の略で、ボランティア活動を通して交流を図ることを目的とした国際組織である。70 ヶ国以上に会員を有する地球規模のネットワークで、隔年で世界会議とアジア太平洋地域会議を開催している。国連広報局 (the UN Department of Public Information) の提携団体（associate status）でもある。

2013 年度は国内外からの本学ボランティアセンターへの視察や訪問者が多かった。その訪問団一行のひとつが、2013 年 7 月にＩＡＶＥ日本事務所の理事長脊戸氏およびＩＡＶＥ会員であるタイのタマサート大学及びタイＮＧＯ一行の訪問だった。この訪問が契機となって、ボラセンは教職員（齋藤百合子センター長補佐と市川享子コーディネーター）と学生（若松健太と井上綾乃。いずれも国際学部国際学科２年）を 2013 年 12 月 8 日から 12 日まで中華人民共和国マカオ特別行政区で開催された第 14 回アジア太平洋地域会議および、同時期に並行して開催された第 14 回アジア太平洋地域会議ユースフォーラムに派遣し、本学ボランティアセンターで Do for Others 事業の活動報告を行うことができた[iv]。

ＩＡＶＥ国際会議（本会議）の成果および学生の感想を以下に記す。

最も大きな成果は、明学ボランティアセンターが東日本大震災に取り組んだ実践活動や枠組み、今後の災害への備えに向けた示唆を参加した各国の方たちと共有できたことである。具体的には「ボランティアと災害」分科会で、ニュージーランド（震災)、タイ（津波と洪水)、フィリピン（台風)、オーストラリア（山火事）など災害時のニーズやボランティアの役割について情報が共有され活発なディスカッションが行われた。さらにこの国際会議参加を契機として、本学ボランティアセンターを紹介する英語での印刷物制作の必要性が認識された。

またユースフォーラムに参加した学生（若松）のコメントを次に記す。

「参加して感じたことは、各国のユースは世界規模で物事を見ているということ。震災支援活動であれば、自国内で起こった震災だけでなく他国の震災にも目を向ける。ニュージーランドのユースは、クライストチャーチで起こった震災での支援活動以外に、日本で起こった東日本大震災の被災地に足を運び、ボランティア活動を行っていた。他の教育ボランティアをしているユースは自国のボランティア活動以外にも、他国へ行って活動を行っている。台湾のユースは “We are the world no wall” と会議の感想を語った。この言葉に非常に心打たれた。世界を見つめ続けることが助け合うことにつながる。これらの世界範囲で見るということは、今現在行っている震災支援活動でのヒントになると感じている。また、この会議で多くのユースとのつながりを作ることができた。これからは、ボランティア活動を行っている者同士が情報交換や意見交換をしつつ、海外とつながることができればよいと考えている」。

会議参加実現に当たっては多くの方々、助成団体の助力を得た。紙面を借りて感謝したい。　（齋藤）

[iv] これらの報告はＩＡＶＥ日本のＨＰ　http://www.iavejapan.org/?p=558 に掲載されている。